

手・手関節鏡手術の現状と未来

整形外科領域において関節鏡手術は花盛りである。膝、肩をはじめとしてあらゆる関節に鏡視下手術が行われており、これは手外科領域においても例外ではない。2017年、名古屋にて行われた第60回日本手外科学会（日手会）において平田 仁会長のご厚意により、「手関節鏡の現状と未来・新進気鋭の手外科医からの提案」というシンポジウムを企画した。立ち見がかなり出るほどの盛会であった。

遡ること2005年、恩師である土井一輝先生が会長であった第48回日手会において、「手関節鏡治療の現況」というパネルディスカッションを企画した。その際の演者と演題名は①安部幸雄（手関節鏡の手技と問題点）、②河野正明（橈骨遠位端骨折の鏡視下手術）、③西川真史（手関節ガングリオンと舟状骨骨折に対する手関節鏡視下手術の応用）、④木戸健司（手関節尺側部障害に対する鏡視下手術）、⑤中村俊康（遠位橈尺関節不安定症例に対する遠位橈尺関節鏡所見）、であった。当時、手関節鏡に積極的に取り組まれていた先生方をお願いして行ったパネルであった。この際もかなりの盛会であったと記憶している。

昨今、足関節鏡がかなりブームとなっているようで、「なぜ手関節鏡は今ひとつスタンダードな手技にならないの？」と、平田先生にある宴会で質問されたのが、今回シンポを開催したきっかけであった。その内容は演者の方々の熱意のおかげで12年前と比較すると随分と進歩を感じられる内容およびディスカッションとなった。これはやはり鏡視下技術の進歩に加え、手関節の解剖学的理解、様々な手関節疾患に対する積極的な鏡視下手術の導入、鏡視下手術のインストゥルメントの発達、によるところが大きいと考える。さらには今回の日手会において、手根骨壊死、母指CM関節症に対するsuture-buttonを用いた手術、MP関節拘縮の鏡視下手術、USE systemの新たな進展、といった発表を拝聴し、手外科分野での鏡視下手術の進歩を実感した。この思いを皆様と共有したく、この企画を思いついた次第である。手関節は神経、血管、腱にかこまれ、直視下手術ではこれら繊細な組織の損傷、癒着といった合併症との戦いが必然となる。さらには手関節内に直視下に進入するには何がしかの靱帯を切離しなければ到達できない。つまり手関節こそが鏡視下手術の最適部位といえる。本企画にて現在のこの分野での進歩を感じて頂き、日常診療において応用していただくことを祈念するものである。

（安部幸雄）